

南日本の拡大と豊饒の学問構想

GABE, Masao / 我部, 政男

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

沖縄文化研究

(巻 / Volume)

31

(開始ページ / Start Page)

278

(終了ページ / End Page)

279

(発行年 / Year)

2004-08-10

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00002673>

南日本の拡大と豊饒の学問構想

我部 政男（山梨学院大学教授）

中村哲先生の師でもある柳田国男は、かつて、日本民俗学における沖繩・琉球の発見を驚異の眼差しを持って述べたことがある。沖繩に連なるの南の地域研究が、日本文化の解明にとっての宝庫であることを強く認識したのである。戦前期における伊波普猷と柳田国男の学問的な邂逅が、かくして豊饒の肥沃を確認しはじめることになる。

現在、法政大学のボアソナード・タワーに沖繩文化研究所が設置されていることは、ある意味で日本文化の大きな誇りではなからうかと、つねづね私は考えてきた。その研究所設置の構想を英断をもって実現したのが、中村哲先生であった。その卓見に脱帽するのみである。その後三〇年間に、同研究所の共同研究による成果が見事に開花していることは、多くの人の認めるところである。

しかし、不幸なことに、かつて、周辺を含めた沖繩研究の重要性が認識されていなかった時代風潮は長く続いた。占領下の中の沖繩の声が、遠くて聞き取れない時代と同じく長く続いた。その民の声を聞こうと中野好夫先生は、沖繩資料センターを設立した。中村先生は、復帰・返還の実現した時点で、沖繩資料センターの歴史的使命の終わるのをタイミング良く捉え、それを引継ぎ、沖繩文化研究所を創設された。それは、沖繩を核にして南進論の系譜とされる地域を日本学の研究地域に編入していこうとする営為と学問的な構想があったからで、その意味で柳田国男、伊波普猷、中野好夫等の敷設したレールの延長線上に、沖繩文化研究所は設立されたといえる。このように緻密に計算された構想を着実に実施に移していく先生の先駆的な決断に、逆に歴史の前後を見定めた進取の気象を彷彿させる。し

かし、そのことは、実際には単線的に単独に実現したわけではないと思う。さまざまなレヴェルの複雑な諸要因と結合しあっていることは言うまでもない。その間隙を埋め尽くす人的な資源、つまり周辺の協力者の存在があったこともまた忘れてはならないはずである。

思いつくままに、先生と沖繩との接触を列举すると、成城での柳田国男先生、仲原善忠先生との出会い、佐喜真興英の著書との出会い、台湾の台北帝国大学での経験、戦後の岩波書店での文化啓蒙活動、中野好夫先生との出会い、法政大学内の諸先生方との接触と協力等が考えられる。

恒例の沖繩文化研究所の公開講演会に、中村哲先生はよく出席された。また懇親会にも姿を見せられ、参加者と親しく会話を楽しんでた。沖繩への出張の折りは、沖繩オリエンタルホテルを好まれ、スケッチブックを携えて海岸に出かけられ、自由な時間を楽しんでおられた。ある時、外間守善先生から沖繩文化研究所の月例会で、研究発表をするように言われ、私は琉球処分と分島改約について話した。その日の参加者は、確か一〇名にも満たなかったが、その中に中野好夫先生、中村哲先生の両先生のお姿も見られ、並んで席を占められた。両先生を前にしての研究発表は、冷や汗をかき大いに緊張した。その先生も孫悟空のように雲に乗って遠くへ旅立たれた。冷たい風と熱い想いが私の胸をよぎる。